

高齢日本人コホートにおけるインフルエンザワクチン応答 に対する若年時放射線被ばくの影響

今回の研究は、若いときに原爆の放射線に被ばくされた方がご高齢になってインフルエンザのワクチン*を接種した場合、若いときの被ばくが、ワクチンによってインフルエンザウイルスに対する免疫（抵抗力）を付ける仕組みに何か影響を及ぼしているか調べたものです。放影研の研究プログラムである成人健康調査（AHS）の中で、放射線の被ばく線量が判明している 292 名の方にボランティアとしてご協力いただいて調査を行いました。

調査の結果、被ばくしていない人と比べて、特にワクチン接種による免疫の付き方には差が見られないことが分かりました。

* ワクチンとは

インフルエンザやおたふくかぜは、ウイルスや細菌（病原体といいます）が体に侵入して症状が出る感染症と呼ばれる病気です。病原体が体に入ると、体の中で細菌やウイルスと戦い体を守ってくれる物質が作られ、次に同じ病原体に感染しても、これを攻撃する仕組みができます。この仕組みを「免疫」といいます。ワクチンは、この免疫の仕組みを利用したもので、人工的に力を弱めた病原体に感染させて免疫をつけておけば、その後同じ病原体が入ってきても発病しなかったり、症状が弱くて済んだり、病気になりにくくすることができます。

本資料は、専門家でない方向けに出来るだけわかりやすく解説することを最優先しています。そのため専門的な内容は割愛しており、論文内容を完全に再現しているものではありません。より詳しい内容は出版社の論文をご覧ください。